

今年、鹿児島島神宮前を流れる宮内原用水路が正徳六（一七一六）年に完成して三〇〇年を迎えます。今回から、宮内原用水路についてシリーズで紹介していきます。

米が作れなかった地域

隼人町の平野部に広がる水田に豊かな水をそそぐ宮内原用水路。現在、これらの地域で稲作ができるのは、まさにその恩恵によるものといえます。

江戸中期、隼人町の平野部の多くは河岸段丘の微高地に覆われ、特に鹿児島神宮の西側（内山田、真孝、小田、野久美田）は平らで、耕作地として非常に良い土地でした。しかし川から直接水を引くことができず、用水路ができるまでの長い間、畑作地としてしか使えませんでした。

汾陽盛常の決意

当時の薩摩藩は、慢性的な財政赤字を解決するため、新田開発に力を入れていました。住民の生活向上を図るためにも、新たな水田の整備は必要不可欠な課題でもありました。

そのような状況の中、当時、郡奉行

の汾陽盛常は、宮内原用水の開鑿を自ら薩摩藩に願ひ出しました。当初難工事と判断され、一度は却下されましたが、現地での説明や粘り強い交渉を続けた結果、藩の家老を説き伏せることに成功。正徳元（一七一〇）年十二月に着工し、五年の歳月をかけ、正徳六（一七一六）年四月に完成しました。

盛常は承応二（一六五三）年生まれ。祖先は中国からの帰化人で、島津家十六代当主の島津義久に仕えました。汾陽家は代々普請奉行など藩の重職を勤める家系で、父・汾陽光東は惣田奉行を勤め、鹿児島谷山の干拓や串良の新田を開いた人です。宮内原用水路が完成した時、盛常は六十三歳でした。

宮内原用水の概要

宮内原用水は、天降川の水分淵から取水し、西光寺、内、内山田、小田、真孝を経て野久美田まで達します。延長は約十二キロで、その灌漑面積は約四三六畝と国分平野で最大の水田域を潤

宮内原用水 完成三〇〇年 その①



西光寺で見られる用水路の「潜り」



出典：隼人塚前の表示板より

しています。取水口と最終尾の田との高低差は約十七メートル。主要部分の用水路は千メートルの五十センチ、つまり二キロで一メートルしか下がらないという極めて水平に近い勾配で、当時の測量技術の正確さに驚かされます。

用水路は途中で、嘉例川と西光寺川を横断するように流れています。ここでは川底に石組のトンネルを通す「潜り」という工法を用いています。さらに、強靱な造りの隧道や暗渠、放水門などが安定した水量を供給するように

なっています。

また、用水路に関する資料『國分宮内御新田溝壺流見譜并見立覚』によると、工事費は『銀一二四貫三七〇匁余』とあります。銀一貫を約二十両とすれば約二千五百両、現在の金額で約二億円にも上ります。

宮内原用水は、全く米が採れなかった土地を約六千石の豊かな穀倉地帯へと変えました。水分淵にある記念碑「大隅国桑原郡西国分郷鑿溝崇水神記」の最後の文章に『水や水や能く鑿つところに従ひ田間を浸し灌ぎ、永年安楽なれ』と水神を祝い歌ったとあります。碑文は当時の人々にとって、宮内原用水の完成がいかに重要で、かつ慶事であったかを今に伝えます。

今回は宮内原用水の工事の概要について紹介します。

（文責 鈴）